

にゆう

三遊亭円朝

青空文庫

昔むかし浅草あさくさの駒形こまたたに半田屋長兵衛はんだやちやうべゑといふ茶器ちやきの鑑定家めきがござい
 ました。其頃そのころ諸侯方しよこうがたへ召めされ、長兵衛ちやうべゑが此位このくらゐの値打ねうちが
 有るといふ時は、直ぢきに其の代物しろものを見ずに長兵衛ちやうべゑが申まうしただけ
 にお買上かひあげになつたと云いふし、此人このひとは大人たいじんでございますから、
 大概たいがいな処ところから呼びに来てきも頓とんと参りません。家うちには変へんな奉公ほうこう
 人にんを置おきましたして、馬鹿ばかな者を愛あいして楽しんでゐるといふ極無慾ごくむよく
 な人でございました。長「何を、往いかねえよ、何なんだと。女房「で
 もお手紙まゐが参まゐりましたよ。長「何処どこから。女房「萬屋よろづや五左衛門ござゑもん
 さんから。長「ムウン又また迎むかひか、どうも度々たび／＼招待せうたい状じやうをつ
 けられて困るなア、先方むかうは此頃このごろ茶ちやを始はじめたてえが、金持かねもちゆゑ

極我儘な茶で、種々道具を飾り散かして有るのを、皆なが胡麻アするてえ事を聞いたが、己ア然ういふ事をするのが厭だから断つてくんなせえ。女房「だつて貴方、度々々の事ですから一度往らつしやいな、余り勿体を附けるやうに思はれるといけませんよ。長「茶も何もやつた事のねえ奴が、変に捻つたことを云つたり、不茶人が偽物を飾つて置くのを見て、これは贋でございますとも謂へんから、あゝ結構なお道具だと誉めなければならん、それが厭だから己の代りに彼の弥吉の馬鹿野郎を遣つて一度でこりくするやうにしてやらう。女房「お止し遊ばせよ、あなたは彼を伶俐と思召して目を掛けていらつしやいますが、今朝も合羽屋の乳母さんが店でお坊さんを遊ばして居る傍で、弥

吉きちが自分の踵かかとの皮かわを剥むいて喰たべさせたりして、お氣いきの毒どくな、子こども
 供衆しゆだもんですから、何なにも知らずむしやく喰たべて居ゐましたが、
 本ほん当たに汚きたな事ことをするぢやア有ありませんか、それこのごろに此こ頃ころでは生な意ま
 氣いきになつて、大おと人なに腹はらを立たせまおとすよ。長なが「いや、馬ば鹿かと鉄てつは使み
 ひやうだ、お前まへは嫌きらひだが、己おれは嗜すだ……弥や吉きちや何どこ処こへ往いつた、
 弥や吉きちイ。弥や「えゝゝ。長なが「フゝ、返おも事しろが面おも白しろいな……さ此こ方ちへ
 来こい。弥や「えゝゝ。長なが「何なんだ大なきな体なり軀しをして立たつてやつる奴やつが有ある
 か、坐すわんなよ。弥や「用もちが有あるなら直ちに往いつて来きるにやア立たつてる
 方はうが早はやえや。長なが「馬ば鹿かだな、苟かり且なりにも主しゆ人じんが呼よんだら、何なにか御ご
 用もちでも有ありますかと手てを突いいて云いふもんだ、チヨツしたう（舌したう打うち）大
 きな体なり軀しで、汚きたね手ての垢あかを手ての掌ひらでぐるく揉もんで出でせば何どの位くらの位ゐ

の手柄てがらになる、物を積つもつて考へて見ろ、それに此頃このごろは生意なまいき気になつて大分大人だいぶおとなにからかふてえが、宜よくないぞ、源蔵げんぞう見たやうな堅かたい人を怒おこらせるぢやアねえぞ。弥「なに彼のあ人はね疝せん氣きが起つていけないツてえから、私わたしがアノそれは薬を飲んだつて無益むだでございませう、仰あふむ向けに寐ねて、脇差わきざしの小柄こづかを腹はらの上に乗のつけてお置おきなさいと云いつたんで。長「ム、ウ禁まじ厭なひかい。弥「疝せん氣きの小柄こづかツ腹はら（千住ぢゆの小塚原こづかつばら）と云いつたら怒おこりやアがつた、跡あとから芳よしぎ蔵うの娘むすめが勞らう症しやうだてえから、南瓜たうなすの胡麻汁ごまじるを喰くへつてえました。長「何なんだい、それは。弥「おやく、勞らう症しやう南瓜たうなすの胡麻汁ごまじるつて。長「馬鹿ばかな事を云いふな、手前てめえは江戸えどツ子こぢやアねえぞ、十と一の時とき三州しうしう西尾にしをの在ざいから親父おやぢが手てを引ひいて家うちへ連つれて来きて、何卒どうぞ

置いてくれと頼たのまれる時、己おれが鼠半切ねづはんぎれへ狂きやう歌うたを書いて遣やつた
 ツけ、ム、ウ何なんとか云つたよ、え、にしを「西尾にしをから東ひがしを差さして来きた小
ぞみなみ僧そう皆みな身の為ために年ねん季き奉ほう公こうと、東とう西さい南なん北ほくで書かいて遣やると、お前まへ
おやぢの親父おやぢがそれそれを国くにへ持もつて往いつて表へう装さうを加かへ、掛かけ物ものにして古ふる
 びが附つき時代時代が附つきますによつて、忤せがれも成せい人じん致いたしませう、それ
 ばかりが楽らくしみでござないませう、何なに分ぶんどうかお世話せわを願ねがひますと、
 親おやぢはそれ程ほどに思おもつてゐるのに、親おやぢの心子こころ知しらずと云いふはお前まへのこ
 とだ。大おほきな体なり軀なりをして居ゐながら、道だう具ぐは些ちつとも覺おぼえやアしねえ、
 親おやぢの恩おんを忘わすれちやア濟すまんぞ。弥や「アハ、親おやだ玉たまア。長なん「何なんだ、
 人ひとが意い見けんを云いつてるのに、誓ほめる奴やつが有あるか、困こまるなア、もう十八じゅうはちだ
 ぜ貴き様さまも。弥や「然さうく来き年は十九じゅうきゅうだ。長なん「其その様さまなことは云いはな

くつても宜い、就ては今萬屋から手紙が来たんだ、先方で己の顔を知らんから、お前己の積で代に往け。弥「へえ、……代てえのは……。長「己の代りに往くんのだ。弥「ハ、それぢやア私がこの身上を貰ふのだ。女房「御覧なさい、馬鹿でも慾張つて居ますよ。長「黙つてゐな、己ア馬鹿が好だ……其儘却つて綿服で往け、先方へ往くと寄附きへ通すか、それとも広間へ通すか知らんが、鍋島か唐物か何か敷いて有るだらう、圍ひへ通る、草履が出て居やう、露地は打水か何かして有らう、先方も茶人だから客は他になければお前一人だから広間へ通すかも知れねえが、お前は辭儀が下手で誠に困る、両手をちごはごに突いてはいけねえよ、手の先と天窗の先を揃へ、胴を詰めて閑雅に

辞儀じぎをして、かね／＼お招まねきに預あづかりました半田屋はんだやの長兵衛ちやうべゑ
 と申まうす者もので、至いたつて未熟みじゆくもの、此後このちともお見知みしり置おかれて御ご
 懇意こんいに願ねがひますと云いふと、先此方まづこちらへと、鑑定めきゝをして貫もらふ積つもりで、
 自慢じまんの掛物かけものは松花堂しやうくわだうの醋吸すすひ三聖せいを見せるだらう、宜よい掛かけも
 物ものだ、箱書はこがきは小堀権十郎こほりごん ちらうで、仕立したてが慥たしか宜よかつたよ、天地てんちが
 唐物からもの緞子どんす、中なかが白茶地しらちやぢの古金欄こきんらんで。弥「へえー……何を。
 長しやうくわだう「松花堂けうすすひの三教醋吸づの図ずで、風袋ふうたい一文字もんじが紫むらさき印いん金きんだ、
 よく見て覚おぼえて置おけ。弥「へえー紫むらさきいろ色いろのいんきんだえ、あれ
 は癢かゆくつていけねえもんだ。長「何なんだ其様そのんな尾籠びろうなことを云いつち
 やアなりませせんよ、結けつ構こうな御軸おちくでございますと云いふんだ、出し
 て見せるか掛かけて見せるか知らんけれども掛かけて有あつたら先まづ辞じ

儀ぎをして、一応おうはい拝見けんして、誠まことにどうもお仕立したてと申まうし、お落着おちつき
 のある流石さすがは松花堂しょうくわだうはまた別べつでございませう、あゝ結構けつこうな御品おしなで、
かやう斯様だうぐなお道具だうぐを拜見はいけん致いたすのは私わたくし共どもの眼めの修業しゆげふに相成あひなりま
 すと云いつて、身みを卑下ひげするんだ。弥や「ひげするんなら、角かどの髪かみゆ
ひどこ結床いへ往いきやア直ぢきだ。長ひげ「鬚するを剃するんではない、吾身わがみを卑いしめる
 んだ、然さうすると先方むかうでは惚ほれ込んだと思おもふから、お引取ひきとり値段ねだんを
 と来くる、其時そのとき買冠かひかぶりをしないやうに、其その掛物かけものへ瑾きんずを附つけ
 るんだ。弥や「へえ、それは造作ざうさくもねえ、破やぶくか。長やぶ「破やぶく奴やつが有あ
 るか、知れねえやうに瑾きんずを附つけるのが道具商だうぐやの秘事ひじだよ。弥や「フ
 、「ヒヂ」は道具商だうぐやより置職たみやの方がつよいで。長だま「黙だまつて人
 の云いふことを聞きけ、醋吸すすひの三聖せいは結構けつこうでございませう、なれども

些ちと御祝儀ごしゅうぎの席いしには向きませんかと存ぞんじます、孔子こうしに老子らうし、釈し迦やは仏ぶつだからお祝いはひの席いしには掛かけられませんか、買かつてくれと云いはれないやうに瑾きんを見出みだして、惜をしい事ことには何どうも些ちと軸ちくににゆうが有ありますと云いつてにゆうなぞを見出みださなくツちやアいかねえ。弥や「へえー……」にゆう」てえのは坊ぼうさまかい。長ちやう「何故なぜえ。弥や「づくにゆうでございますツて。長ちやう「然さうぢやアねえ、軸ちくに「にゆう」が有ありますと云いふのだ。弥や「へえー。長ちやう「にゆうを知らんか、道具商だうぐやの御飯おまんまを喰くつて、「にゆう」を知らん奴やつもねえもんだ。弥や「アハ、何なんの事ことだ。長ちやう「瑾きんが出来できたと云いつては余あり素しらう人とじみ染みるから、瑾きんを「にゆう」と云いふが道具商だうぐやの通あたりまへ言まへだ。弥や「へえ、始はじめて聞きいた。長ちやう「何どうかすると、お客きやくさまに腰こしの物ものを

出されるかも知れねえ、然うしたら私は小道具の方とは違ひます
 ゆゑ刀劍の類は流違ひでございませうから心得ませんが、拝
 見だけ仰せ付けられて下さいますと云つて、先頭から先へ眼を
 付け、それから縁を見て、目貫から何うも誠にお差ごろに、定め
 し御中身は結構な事でございます、当季斯やうな物は誠に少
 なくなりましたがと云つて、服紗を刀柄へ巻いて抜くんだよ、先
 方へ刃を向けないやうに、此方へ刃を向けて銚子先まで出た処
 でチヨンと鞆に収め、誠に結構なお品でございますと、誉めな
 がら瑾を附けるんだ、惜しい事には揚物でございませう。弥
 「へえ天麩羅かい。長「解らんのお、長い刀を揚げて短くしたの
 を揚身といふ。弥「矢張あなごなどは長いのを二つに切りませう

よ。長「喰くらひ意い地ぢが張はつてるな、鑑めき定ぎが濟すむと是これからお茶を立て
 るんで御お広ひろ間まへ釜かまが掛かつて居ゐる、お前めえにも二三度教どへた事あも有あつ
 たが、何時いつも飲のむやうにして茶ちやわん碗わんなぞは解わかりません、何なんでござ
 いますか誠まことに結けつ構こうな御お茶ちやわん碗わんでと一々聞きいて先方むかうに云いはせなけ
 ればなりませんよ、それからほッぽと烟けむの出でるやうなお口くちとり取とり
 出でるよ、粟あはまんぢう饅まんぢう頭とうか蕎そば麦まんぢう饅まんぢう頭とうが出でるだらう。弥「へえ、何人なんにんまへ前まへ
 出でるえ。長「何人なんにんまへ前まへなんて葬とむらひ式しきぢやア有あるまいし、菓子器くわしきへ
 乗のせて一つよ。弥「たつた一つかア。長「がつく喰くふと腹はらを見
 られるは。弥「ぢやア腹はらがけ掛かけを掛けて往いきませう。長「フ、其そ
 の棧さんとめじま留ぬのこ縞のこの布ぬの子こに、それで宜よい、袴はかまは白しろ棧ざんの御ご本ほん手て縞しまか、変へん
 な姿すがただ、ハ、ハ、ハ、のう足た袋びだけ新あたらしいのを持もたしてやれ。弥「ぢ

やア往いつて参まゐります。と火ひの附つきさうな頭あたま髪かみで、年とし寄よりだか若い
 か分わかりません。長なが「随ずい分ぶん茶ちやの有ある男をとこだな……草履ざうり下げ駄たを片かたちん
 ばに履はいて往ゆく奴やつがあるか、狗いぬがくはへて往いつた、外ほかに無ないか、
 それではそれで往いけ、醋す吸ひの三せい聖せい、孔こう子しに老らう子しに釈しや迦かだよ、天てん地ち
 が唐物からもの緞子どんす、中なかが白しろ茶ちや地ぢ古こ錦きん欄らん、風袋ふうたい一いち文もん字じが紫むらさき印いん
 金きんだよ、瑾きんずの事ことがにゆうだよ、忘わすれちやアいけないよ。弥や「へ
 い畏かしこまりました。とびよこく出で掛かけましたが、愚おろかしい故ゆゑ萬よろづ
 屋や五ご左ざ衛ゑ門もんの表おもて口ぐちから這はい入いればよいのに、裏うら口ぐちから飛とび込こ
 んで、二重ちゆうの建けん仁ねん寺じ垣がきを這はい入いり、外そと庭にはをとほ通とほりまして、漸やう々く
 庭には伝たひに参まゐりますと、萱かや門もんが有あつて締しめてあるのを無む理りに押お
 したから、門かんぬきぬぬ、扉とびらが開あく機はすみに中なかへ転ころがり込こみ、泥どろだらけ

になつて、青苔あをこけや下草したくさを踏み暴しあら、迂つて転んで石燈籠いしどうろうを
 押倒おしたふし、松ヶ枝まつえを折るといふ騒ぎさわで、先程さきほどから萬屋よろづやの主人あるじ
 は、四畳でふかこひの囲はいへ這入り、伽羅きやらを焼たいて香かうを聞いて居をりました。弥や
 吉きちは方々ほう／＼のぞ覗のぞいたが誰だれも居あません。ふと囲かこひへ眼めを附つけ、弥こ「此
 中なかに人が居あるだらう。と怪けしからん奴やつで、指ゆびの先さきへ唾つばを附つけ、
 ぷつりと障子しやうじへ穴あなを開あけ覗のぞき見て、弥や「いやア何か喰くつて居あり
 アがる。主人「これ、誰たれか来たよ……誰だれだ、其処そこへ穴あなを開あけたの
 は、怪けからん人ひとだな、張立はりたての障子しやうじへほつ／＼穴あなを開あけて乱らんば
 暴うな真似まねをする、誰だれだな、覗のぞいちやアいかん、誰だれだ。弥「ハ、
 何どうか怒おこつてやアがる、えへ、御免ごめんなさい。主人「これは驚おどろ
 いた……誰だれか来こいよ、変へんな人が来きたから……其処そこは這入はいる処ところぢや

ア有りません、づかく這入つて来ちやアいけません。弥「門を
 破つて這入つた。主人「おゝゝ、乱暴狼藉で、飛石などは
 狗の糞だらけにして、青苔を散々に踏暴し、折角宜い
 塩梅に苔むした石燈籠を倒し、松ケ枝を折つちまひ、乱暴
 だね……何方からお入来なすつた。弥「アハ、驚いちまつたな
 ……コ、予々お招きになりました半田屋の長兵衛で。主人
 「へえー是は驚き入つた、左様とは心得ず甚だ御無礼の段々
 \なん何ともどうも、是は恐縮千萬……何卒是れへく速か
 にお通りを願ひます、何卒是れへ是れへ。弥「ハ、狭つこい処
 に這入つてるな……己ア手前に禁厭を教へてやらうか。主人
 「へ、御冗談ばかり……へえ成程……え、予々天下

うめい 有名のお方で、たいじん 大人で在つしやると云ふ事は存じて居りまし
 たが、けふ 今日は萬屋のうちへ始めて往くのだから、わざと裏口か
 らお這入りになり、萱門を押しやぶつて散々に下草をお暴
 しになりました所の御胆力、どうも誠に恐入りました事で、
 こんにちごじゆらい なん 今日の御入来は何とも何うも実に有難い事で、おほ
 ほま 誉れに相成ります、どうぞみや 何卒速かに此方へく。弥「私アお前にりん
 びやうおこ 病が起つても直に療る禁厭を教へて遣らう、繩を持つて来な、
 ぢき なほ 直に療らア。主人「はてな…へえ。弥「痲病（尋常）
 なわ に繩にかゝれと云ふのだ。主人「えへ、御冗談ばかり、おか
 らかひは恐入ります、え、始めまして…（ていねい 丁寧に辞儀をし
 て）てまへ 手前は当家の主人五左衛門と申す至つて武骨もので、どうか

度^ど拜^{はい}顔^{がん}を得^えたく心^{こころ}得^え居^をりましたが、中^{なか}々^く大^{たい}人^{じん}は知^しら^らん処^{ところ}
 へ御^ご来^{らい}臨^{りん}の^{ない}事^じは存^{ぞん}じて居^をりましたが、一^ど度^どに^{ても}先^{せん}生^{せい}の御^お
 入^い来^でが^{ない}と朋^{ほう}友^{いう}の^{まへ}前^{まへ}も^{じつ}実^{じつ}に^{ぐわい}外^{わい}聞^{ぶん}悪^{わる}く思^{おも}ひ^ます所^{ところ}から、御^ご
 無^ぶ礼^{れい}を^かへ^り再^{さい}度^ど書^{しょ}面^{めん}を^さ上^さげ^ました^が、お断^{ことわ}りの^みに^て今^け日^ふ
 も御^お入^い来^では^あ有^ある^まいと存^{ぞん}じ^ました^が、凶^{はか}ら^ざる^{ところ}の御^ご尊^{そん}来^{らい}、朋^ほ
 友^うの^{もの}者^{もの}に^{ぐわい}外^{わい}聞^{ぶん}旁^{ぼう}誠^{じやう}に^あり^がた^い難^{なん}い^事で恐^{おそれい}入^いり^ます……何^どうも
 お身^み装^{なり}の^{ぐあ}合^{あひ}、お袴^{はかま}の^はき^き穿^きやう^{から}更^{さら}に^お飾^{かざ}り^なさ^らん所^{ところ}と云^いひ、
 お履^はき^{もの}物^{もの}が^どうも不^ふ思^し議^ぎで、我^{われ}々^々が^{さや}紗^や綾^{りん}縮^{しゆく}緬^{めん}羽^は二^に重^{じゆう}を^き着^きま^すの
 は心^{こころ}恥^{はづ}かしい^事で、既^{すで}に^{しん}新^{しん}五^ご百^{ひゃく}題^{だい}にも^あ有^あり^ます通^{とほ}り「木^も綿^{めん}着^き
 る^を男子^{のこ}の^{やう}に奥^{おく}ゆ^かしく見^みえ」と^{じつ}実^{じつ}に^お恐^{おそれい}入^いり^ます、何^{どう}卒^{そつ}此^こ方^{ちゆう}
 へく。弥^{めえ}「お前^{まへ}さん^の処^{ところ}から頼^{たの}み^が有^あつた^{ので}見^みに^き来^きた。主^{しゆ}人^{じん}

「それは誠に恐入ります。弥「手を揃へてお辞儀をするんだが
 どううだい……此位で丁度揃つて居るか居ねえか見てくれ。
 主人「へへへ、御冗談ばかり。弥「揚物が解るか、揚物て
 えと素人は天麩羅だと思ふだらうが、長えのを漸々詰めたのを
 揚物てえのだ、それから早く掛物を出して見せなよ、破きア
 しねえからお見せなせえ、いんきんだむしの附着いてる箱は川
 原崎権十郎の書いたてえ……えへ、這つて転んだので忘れちまつ
 た、醋吸の三聖格子に障子に……簾アハ、ハ、ハ、おい何うした、
 確かにしねえ。主人五左衛門は驚きまして太鼓張のふすまを開
 けて、五「アツ。と口を開けたまゝ水屋の方へ飛出しました。弥
 「おい……ハ、ハ、ハ、彼方へ逃げて行きやアがつた、馬鹿な奴だなア

……先刻さつきむぐぐ喰くつてゐた粟饅頭あはまんぢう……ムンこゝに烟けむの出でる饅ま頭づがある、喰くかけて残のこして往いきやアがつたな。と香炉かうろを手とに取とりあげ、銀ぎんの匙さじで火ひの附ついた香かうを口くちへ入れ、弥や「おゝ熱あつつゝゝゝ。
 五ご「乱暴らんぼうな人ひとだ、火ひを喰くつてらア、口くちの中に疵きずが出来できましたら
 う。弥「いえ、にゆうが出来できました。

(抛酒井昇造筆記)

青空文庫情報

底本：「明治の文学 第3巻 三遊亭円朝」筑摩書房

2001（平成13）年8月25日初版第1刷発行

底本の親本：「定本 円朝全集 巻の13」世界文庫

1964（昭和39）年6月発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2009年8月14日作成

2011年9月3日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

にゆう

三遊亭円朝

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>